

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：32690
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23730771
研究課題名（和文）「科学教育学協会」における「教育的教授」論の誤読とその学校教育学的展開
研究課題名（英文）Misreadings of Educatinal Instruction in “Verein für Wissenschaftliche Pädagogik” and Its Deployment in School-Education Theory
研究代表者
牛田伸一（SHINICHI USHIDA）
創価大学・教育学部・准教授
研究者番号：90546128

研究成果の概要（和文）：ヘルバルト学派の全員が全員、ヘルバルトの「教育的教授」論を誤認識していたわけではなかった。ここで言うところの誤認識とは、「教育的教授」と「訓練」の一体性の看過のことである。コリアントによると、シュトイは「学校生活」の概念を以って、イエナのゼミナール訓練学校のなかで両方の一体性のある学校を構想し実践していたと見られる。ただし、三つのキーワードの関係が理論的に説明されていないこと、さらにはヘルバルト自身が学校そのものを忌避していた事実とシュトイの学校実践との関連が示されていないこと、これらは問題である。この究明については、本研究の継続的な課題である。

研究成果の概要（英文）：All of Herbartarians have not mistaken Herbart’s Theory of “Educational Instruction”. This Misconception which I said means overlooking the Oneness of “Educational Instruction” and “Self-Discipline”. According to R. Corinad, K. V. Stoy has envisioned and run Schools at University Jena with the Concept “School-Life” in which that Oneness was incorporated. But three Keywords “Educational Instruction”, “Self-Discipline” and “School-Life” were not strictly related, and the Relations were also theoretically not explained. Moreover, the Connation between the Fact that Herbart himself recused Modern-Schools and Stoy’s School-Practices was not showed. This Investigation must be continued.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：教育方法学

科研費の分科・細目：教育学、教育方法

キーワード：ヘルバルト、ヘルバルト学派、科学教育学協会、教育的教授、学校生活、ドイツ教授学

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 先行研究

ヘルバルト（Herbart, J. F.）は教授段階説を提唱した人物だと一般的には認知されてきた。そのため、彼の「教育的教授」論も、近代学校の授業のなかで道徳主義の知識を教え込む簡便な方法に過ぎないとわが国で

も考えられてきた。しかし、1970年代半ばから彼の原典が丹念に解釈され、「教育的教授」論は単なる授業方法ではなく、人間形成の基礎理論であることが指摘された（Benner, 1977）。しかもそればかりではなく、近代学校の授業方法の祖だとされた彼自身が、実際には厳しく学校を批判していたこと、さらには学校のあり方はこの基礎理論にしたがっ

て決められるべきだと主張していたことも究明された (Benner, 1976) (牛田, 2008)。このように彼の「教育的教授」論に関する研究は、近代学校教育に対する批判とその克服の文脈において、新たな展開を見せてきている (牛田, 2010)。

## (2) 基本的問題関心

この先行研究にしたがい、従来とは 180°異なるヘルバルト像を目の当たりにするとき、次の疑問が浮かぶことになった。すなわち、何ゆえに彼が近代学校における授業方法の提唱者であり、その中身が「教育的教授」論であるといった、誤った理解がまかり通ることになったのか、またそうした誤認識はどのように形成されていったのか、という疑問である。この問いに研究開始当初の基本的問題関心が集約されていた。

## (3) 研究の枠組み

この問いの究明の方法として研究の初発時に採用しようとしたのが、ヘルバルト学派による「教育的教授」論の展開と継承における組織的な取り組みへの着眼であった。シュトイ (K. V. Stoy)、ツィラー (T. Ziller)、デルペルト (F. W. Dörpfeld)、そしてライン (W. Rein) など、多方向に拡散したと予想される誤認識は、理論的には彼らの原典の参照を通して、また実践的には、この学派による「教育学ゼミナール (以下、「ゼミナール」と略す)」の取り組みの把握から、そしてこれら両側面をツィラーを核とする「科学教育学協会 (Verein für wissenschaftliche Pädagogik)」の活動と議論から接近することによって捉えられる、との見通しがあったからである。

## 【1の参考文献】

Benner, D. (1977) : Was ist Schulpädagogik. In: Studien zur Didaktik und Schultheorie. Weinheim und München 1995.

Benner, D. (1976) : Herbart als Schultheoretiker. In: Busch, F. W./Raapke, H.-D. (Hrsg.) : Johann Friedrich Herbart. Leben und Werk in den Widersprüchen seiner Zeit. Oldenburg.

牛田伸一 (2008) 「学校批判としての『教育的教授』論」『教育方法学研究 (第 33 巻)』日本教育方法学会、109-120 頁.

牛田伸一 (2010) 『「教育的教授」論における学校批判と学校構想に関する研究』協同出版.

## 2. 研究の目的

以上のような研究開始当初における基本的問題関心と研究方法を以って、研究の目的

については、科学研究費補助金の応募時には、次のように設定していた。すなわち、「本研究の目的は、ヘルバルトの原典および先行研究を入念に読み込み、その『教育的教授』論に従来の『定説』とは 180°異なる解釈を施した上で、誤読による『定説』が、どうしてそしてどのようにして浸透することになったのか——この問いを究明することにある。ヘルバルト学派は 19 世紀半ばから興隆したが、この『定説』が浸透する理由とプロセスを、理論的には彼らの原典を参照することによって、そして実践的には、試行された『教育学ゼミナール (実験学校)』の取り組みを追跡・復元することによって、そして両者の基盤に『科学教育学協会 (Verein für wissenschaftliche Pädagogik)』の諸活動の解明を据えることによって、明らかにする」。

## 3. 研究の方法

### (1) 予定された研究の三つの柱

「教育的教授」論の誤読の理由とその形成過程を究明する、という目的を達成するための手続きは、以下の三つを柱としていた。

柱の一つは理論的アプローチであり、ヘルバルトによる「教育的教授」論の内実を厳密に把握するとともに、ヘルバルト学派による「教育的教授」論の解釈の非妥当性を診断することであった。

二つ目の柱は実践的アプローチであり、両者の「ゼミナール」の実践の一次資料を参照し捉え、誤読による実践を際立たせることであった。

そして柱の三つ目は前述の二つの柱を貫くもので、「科学教育学協会」における諸活動の実際を、一次資料を発掘し丹念に追跡することを通して、明らかにすることだった。

### (2) 研究上の具体的な問いの設定

「教育的教授」の理論的アプローチと実践的アプローチに関して、それぞれを問いの形式で表現する場合、それは以下のようにまとめられた。

①「教育的教授」の構想をヘルバルトはどのように描いていたのか。ヘルバルト学派は師の「教育的教授」をどのように解釈していたか。ヘルバルトのオリジナルとの捉え方のちがいはどこにあるのか。そしてそうした差異に近代学校はどのように関係してくるのか。

②ヘルバルトによる「教育学ゼミナール」の取り組みはどのようなもので、「教育的教授」の理論構想とのつながりをどう読み取ることができるか。ヘルバルト学派による「教育学ゼミナール」の試みはどのようなもので、そこには師 (ヘルバルト) の「教育的教授」を誤読した結果がどのように反映されてい

るか。

### 【3の参考文献】

Adl-Amini, B./Oelkers, J./Neumann, D.  
(1979) : Pädagogische Theorie und  
erzieherische Praxis. Bern und  
Stuttgart.

田口淳・牛田伸一・原田信之 (2002) 「国際  
ヘルバルト学会」設立についての報告『九州  
看護福祉大学紀要 (第四巻)』九州看護  
福祉大学。

## 4. 研究成果

(1) 問題関心の微細ではあるが、重要な修正の試み

上記の 1~3 に示した計画に基づき研究を進めるプロセスで、筆者の問題関心の修正を迫る先行研究に突き当たることになった。この研究とはケンパー (Kemper, H. 2001) の「学校の開放性と要求と学校教育の課題」である。重要な箇所なので、少し長くなるが、引用しておこう。

国家に占有される、純粋な「学習学校」としての大衆学校を目の前にして、世紀の転換期の頃に、新ヘルバルト主義のヴィルヘルム。ラインが強調して要求したのは、生徒が学校で「性格陶冶」に奉仕するよう行為へと唆されるべきであるならば、「新鮮で自由な学校生活」のための「実践的な回転領域 (遊び場)」を学校は提供しなければならない、ということである。教授における思想圏の秩序化について、教師と生徒への「継続的な関わり」としての「訓練」のためのヘルバルトの熟考が忘れられてはならない。教育的な学校生活の考えを持って、ラインは再び彼の弟子であるヘルマン・リーツに影響を与えた。田園教育舎をリーツは「行為の学校」として特徴づけた。その行為志向の学校生活で以って、この行為の学校は、次のラインの弟子であるペーター・ペーターゼンとその学校共同体思想の模範になった。そこでのデルペルトとの思想上の親近さは見落とされ得ない。

筆者が想定していたヘルバルトにおけるオリジナルの「教育的教授」論のヘルバルト学派による誤認識は、当初の見通しては、「教育的教授」と「訓練」の一体性の無視 (牛田、2008) にあると考えていた。しかし、このケンパーの研究を参照する限り、この見通しを修正しなければならなくなった。すなわち、少なくとも——他の学派のメンバーはどうであれ——ラインは両方の一体性を無視はしていなかった、ということである。それゆえ、この意味において「誤読」したわけではなかったのであれば、彼がヘルバルトをどう

読んだのかについて、とりわけヘルバルトのオリジナルとの差異に立ち入って論じること、筆者は迫られたわけである。

さらには、ケンパーのこの発言は、ヘルバルト学派 vs. 改革教育学という筆者が抱いていた月並みな先入見の誤りを白日の下にさらさせることになった。ヘルバルト学派であったラインの「教育的教授」論の解釈が、改革教育学的実践へとつながっている意味で、ヘルバルトからの教授学上の連続の可能性を明確に看取させることになったからである。

また、上記の「必ずしも一体性を無視したわけではなかったこと」と「教授学上の連続の可能性」については、この研究に本格的に着手する直後に、わが国でもこれを自覚的に取り上げた先行研究が、筆者の眼に触れられることになった (熊井、2010)。

そのため、まずはヘルバルト学派のライン、そしてその師匠筋にあたるツィラーとシュトイによるヘルバルトの「教育的教授」論の解釈と学校構想について、正確にとらえることが、「3. 研究の方法」の①の問いに照らして、よりいっそう不可欠になったのである。

### (2) シュトイの「教育的教授」論

#### ①研究の見通しの修正の実際

ライン、ツィラー、シュトイそれぞれにおけるヘルバルトの「教育的教授」の解釈を検討する必要性が認識されたが、まず本格的に着手したのは、シュトイのそれである。その理由は、すでに筆者自身の研究のなかで、安易な即断というミステイクを犯していたからである。

筆者が自分のかつての研究において見通していたシュトイによるヘルバルトの「教育的教授」論の誤認識は、次のようなものだった。「『教育的教授』と『訓練』の共属性から眺めるならば、シュトイの試みは『教育的教授』というコインの表だけに過大な期待を投げかけて、その裏の『訓練』の重要性をほぼ無視していたと見るべきだろう」 (牛田、2008)。「『教育的教授』論に内在していたはずの行為志向的な教育実践の構想が捨て去られた」 (牛田、2008)。

筆者はこの文章で、シュトイがヘルバルトの「教育的教授」論の解釈について「訓練」、つまり行為志向的な教育実践の構想を看過した (つまりは、誤認識した) ことを指摘したわけであるが、しかしこれは近年のシュトイに関する研究からすれば、必ずしも正しくないことが明らかになった。なぜなら、シュトイは「訓練」をいかに学校教育に組み込めるかに腐心していた、との解釈が提示されているからである。

まずはブリートナーのシュトイ評を参照しておこう (Blidner, 1908)。彼は次のよう

に述べている。「シュトイの教育学は、まったくヘルバルト的なものの大地の上にある。しかし、彼はこれをさらに拡張して、特に次の方向に広げている。彼は教授と訓練の間の完全な均衡というヘルバルトの偉大な思想を、真正な学校生活の理念の形成を通して実現しようと試みた」。この見方によると、ヘルバルトの偉大な思想は、教授と訓練の均衡であり、それをシュトイは「学校生活の理念の形成」を以って実現しようとしたとされる。この解釈が妥当であるとするならば、少なくともシュトイは、「教育的教授」と「訓練」の一体性の無視ではなく、それらを学校へと何らかの仕方で「拡張」したということになる。

②コリアントによるシュトイの「教育的教授」論の解釈とヘルバルトのオリジナルの「教育的教授」論から見た問題点

シュトイの「教育的教授」と「訓練」との関係については、すでにコリアントにおいて次のような見方が提示されている。すなわち、『教育的教授』は……、教育実践において『訓練』と並び立って——したがって『訓練』から独立して——はたらくような、教育手段として把握されているのではない。それどころか、ヘルバルトによる『教育的教授』の理念は、もっぱら『教授』と『訓練』の結合においてのみ——したがって、教育における事象と人格の構成要素の結合——『子どもの養育』に対して必要で、教育の外的な条件を作り出すが、それでも永続的には努力されない『管理』の基礎に基づいて、現実のものとなり得る、という見解（Corinad, 2007）があるが、この先駆者がシュトイだとされている。コリアントによると、シュトイは「学校生活（Schulleben）」について理論体系化したわけではなかったが、「学校生活のシュトイの実践は、教育的教授の理念の実際を描いている」と見られている。

なるほど、コリアントが詳細に明らかにしているように、シュトイのゼミナール訓練学校（ヨハン・フリートリヒ学校）やプレ・ギムナジウムの実践は「学校生活」が豊かに子どもの行為を志向した環境整備が施されていた。その限りで、彼女が「シュトイはヘルバルトの『教育的教授』の理念のほとんど同じである一つの現実を作り上げた」と捉えることには一定の解釈妥当性があるものと思われる。ただ、次のような解決されるべき問題も残されている。

一つは、シュトイが「学校生活」を理論体系化していなかったとしても、この概念と「教授」と「訓練」の関係を理論的に関係づけることが放棄されている、ということにある。ヘルバルトの理論枠組みから、これを説明しなければならないだろう。

問題のもう一つは、左記下線部で「拡張」について述べたが、「教育的教授」論を学校実践に「拡張」することについて、シュトイはどのような見方を取っていたのか、が示されていない、ということにある。近代学校を忌避したヘルバルトの「教育的教授」を学校のなかで具現化することに、理論構成上のつまずきが自覚されていたのか、自覚されていなかったのか。

この二点については、今後もツィラーやライン、その他のヘルバルト学派の人物について、「科学教育学協会」の活動を補足しつつ、明らかにしなければならない課題でもある。

#### 【4の参考文献】

- 熊井将太（2010）「イエナ大学附属学校を舞台とした教授学研究の展開」『第69回日本教育学会大会研究発表要項』（日本教育学会、344-345頁）。
- 牛田伸一（2008）「学校批判としての『教育的教授』論」『教育方法学研究（第33巻）』日本教育方法学会、109-120頁。
- Bliedner, A (1908) : Stoy, Karl Volkmar. In: Rein, W. (Hrsg.) : Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik. Bd.8. Langensalza.
- Coriand, R. (2007) : Erziehender Unterricht und Schulleben. Der Herbartsschüler Karl Volkmer Stoy. In: Klaus Klattenhoff (Hrsg.) : Beiträge zu schulpädagogischen Grundsätzen Johann Friedrich Herbart's. Oldenburg.

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牛田伸一 (SHINICHI USHIDA)

創価大学・教育学部・准教授

研究者番号：90546128

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：